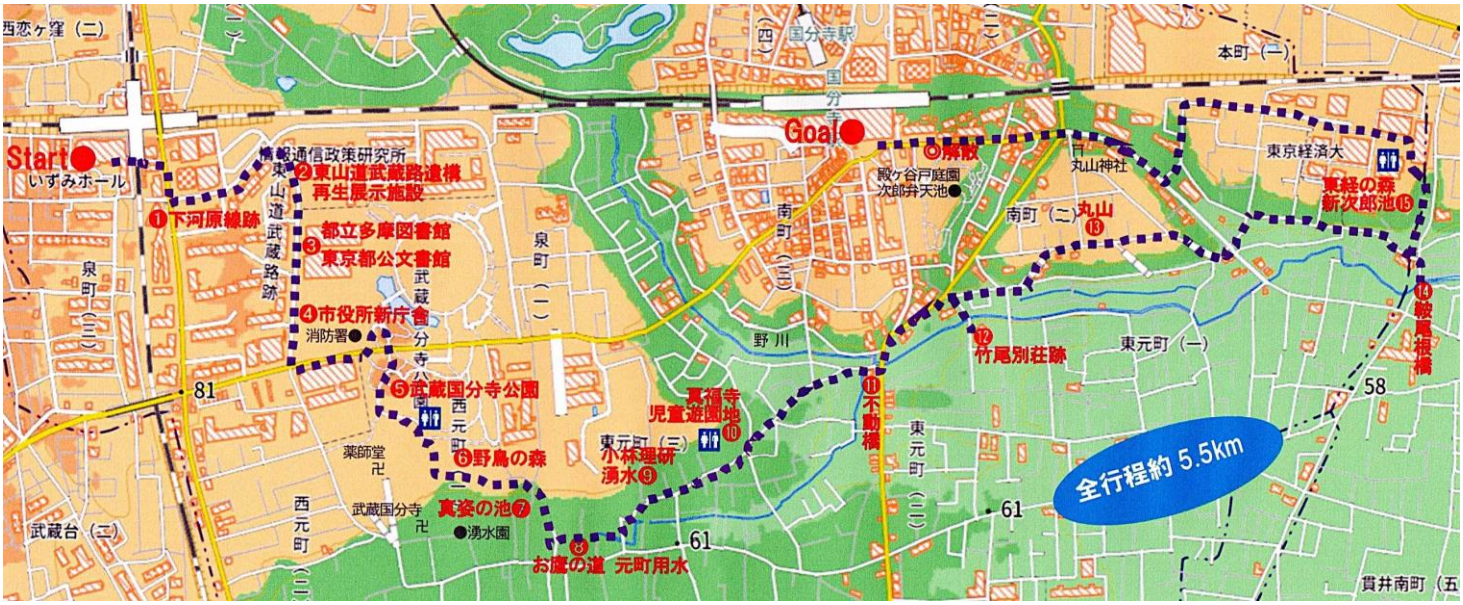
第 14 回エコミュージアム国分寺―自然と歴史・文化散策　令和 6 年 12 月 6 日

国分寺崖線の自然と湧水を訪ねて

エックス山等市民協議会

朝から青空が広がり絶好の散策日和の中、23 名の方に参加いただき第 14 回エコミュージアム国分寺を開催しました。今回は国分寺市の貴重な財産である崖線の自然と湧水や史跡なども訪ねながら、西国分寺駅から武蔵国分寺公園をへて崖線沿いを東経大・新次郎池までたどり、国分寺駅へ戻るコースで歩きました。

集合場所は西国分寺駅南口のいずみホール前。出欠確認を行い、挨拶や散策行程の説明のあと、最初の見学場所、武蔵野線開業まで走っていた下河原線跡に向かいました。



❶ 下河原線跡

下河原線は、かつて国分寺駅から府中市の多摩川北岸の下河原駅まで走っていた国鉄中央線の支線です。1910（明治 43）年に多摩川の砂利を運ぶ東京砂利鉄道として開業。その後、国有の貨物線となり、1933（昭和 8）年の東京競馬場開設に伴って東京競馬場前駅を設け、旅客輸送を開始し競馬客を運びました。そのため東京競馬場線ともいわれました。

その後、富士見仮乗降場（現北府中駅）を開設し通勤客などを運びましたが、1973（昭和 48）年 4 月 1 日に武蔵野線が開業すると旅客営業を終え廃止となりました。西国分寺駅は、その武蔵野線の開業に伴って誕生しました。なお、国分寺市は 1955（昭和 30）年、下河原線多喜窪駅の開設運動に乗り出しましたが実現には至りませんでした。

❷ 東山道武蔵路跡

7 世紀後半の日本は、中央集権的な国づくりを進めていく中で、全国を都が置かれた畿内 5 ヵ国（五畿）と 7 つの行政区に分け、諸国の国府を経由して都とを結ぶ道路網を整備しました。これを七道駅路（東海道・東山道・山陽道・山陰道・北陸道・西海道・南海道）といいます。武蔵国は行政区としては東山道に配属されましたが、上野国（群馬県）や下野国（栃木県）を通る東山道の駅路からは南へ大きく外れた位置にあります。そのため、上野国の新田駅付近から武蔵国府に南下する支路が造られ、これが東山道武蔵路です。

発掘調査によって良好な状態で埋蔵されていることが確認された 3 地区（西元町 2 丁目、泉町 2 丁目、西恋ヶ窪 1 丁目）が、2010（平成 22）年 8 月に史跡武蔵国分寺跡に追加指定されました。西元町および泉町の調査区では、側溝を伴った幅約 12m の路面が踏み固められた路跡が出土しました。

■東山道武蔵路の再生展示

1995（平成 7）年に発掘調査が行われました。現在は中央線が東西の切り通しを走っていますが、武蔵路は北方の恋ヶ窪谷に向かって下る切り通しになっていました。ここでは当時の道路の面を型取りして復元したレプリカを作成し、遺構と同じ位置で、高さ（標高）を上げて展示しています。

■東山道武蔵路の遺構

発掘調査の後、遺構は幅 15m、延長 400mに渡り、地下 0.8m～1.0m の深さに埋設保存し、地上には発掘された側溝の位置および形状を、茶色のアスファルト上に黄色で忠実に平面表示しています。

■東山道から東海道への所属替え

東山道武蔵路を利用するのは不便であり、771（宝亀 2）年に武蔵野国は東海道に属することになり、都から武蔵国府への官道は相模国経由となりました。武蔵路は東山道としての役割は終えましたが、その後も武蔵国内を南北に縦貫する主要交通路として平安時代末期まで使用されました。939（天慶 2）年の平将門の乱では下野・上野・武蔵・相模と次々に国府を攻め取る際にもこの路が利用されたと考えられます。中世においては、東山道武蔵路のルートは上野国から相模国へと通じる「鎌倉街道上ツ道」にほぼ踏襲されています。

❸ 都立多摩図書館・東京都公文書館

■都立多摩図書館

都立多摩図書館は、1997（平成 9）年 1 月に立川から移転・リニューアルオープンしました。この図書館は、雑誌の特性を活かしたサービスを行う「東京マガジンバンク」と、子供の読書活動を推進する「児童・青少年資料サービス」の 2 つの機能を柱に設立された図書館ですが、閲覧専門で貸し出しは行っていません。

「東京マガジンバンク」では、あらゆるジャンルの雑誌約 1 万 9 千誌を所蔵しています。特に 1877（明治 10）年から現在までの雑誌の創刊号を揃えた「創刊号コレクション」は圧巻です。「児童・青少年資料サービス」では、乳幼児から高校世代までが楽しめる本、学

習に役立つ本を、こどものへや、青少年エリアに揃えています。また、子供の読書に関わる方への支援として、相談や調査研究の資料の提供を行っています。ほかに、各種セミナーの開催や所蔵する 16 ミリフィルムによる定例映画会も開催しています。

■東京都公文書館

公文書館とは、歴史的な史料としての公文書を保管し、公開する機関・施設で、民主社会に不可欠な制度とされています。東京都公文書館は 1968（昭和 43）年に開設され、東京都の公文書や東京都の前身である東京府・東京市の公文書及び行政刊行物、江戸・東京に関する歴史資料・図書、地図等を収集・保存し、公開・利用をはかっています。

当初は港区にありましたが再開発により一時世田谷区に仮移転。2020（令和 2）年、国分寺市泉町に新公文書館が完成し移転オープンしました。所蔵資料の閲覧のほか、定期的に展示会の開催、デジタルアーカイブスにより江戸明治期史料や東京都広報写真等 2000 点近い資料のインターネット公開も行っています。

❹ 国分寺市役所新庁舎

国分寺市では、災害時の拠点としての機能が不十分で、かつ耐震性能の課題から旧本庁舎を解体したことに伴い、市内各所に分散していた行政の機能を集約し、良質な市民サービスを提供するため新庁舎を建設しました。

この新庁舎は、今年（令和 6 年）9 月に竣工となり、来年 1 月 6 日（月）より業務を開始します。建物は、地上 5 階、地下 1 階です。建設費は、用地取得なども含め約 149 億円になります。

5 階は、市民に開かれた議会エリアとなっており、都立武蔵国分寺公園から都心まで一望できる「木漏れ日テラス」が設けられ、だれでも自由に出入りすることができます。

ただ今、引越準備に向けて作業を進めているところで、緑と公園課は 12 月 30 日（月）に引越しをする予定です。緑と公園課の執務室は 3 階になります。

❺ 武蔵国分寺公園

都立武蔵国分寺公園は、2002（平成 14）年に旧国鉄中央学園跡地に「泉地区」（多喜窪通りの北側)が開園し、2004（平成 16）年に逓信住宅跡地に「西元地区」（多喜窪通りの南側）が開園しました。その経緯から、泉地区には蒸気機関車の動輪をモチーフとした鉄道学園記念碑が設置されています。

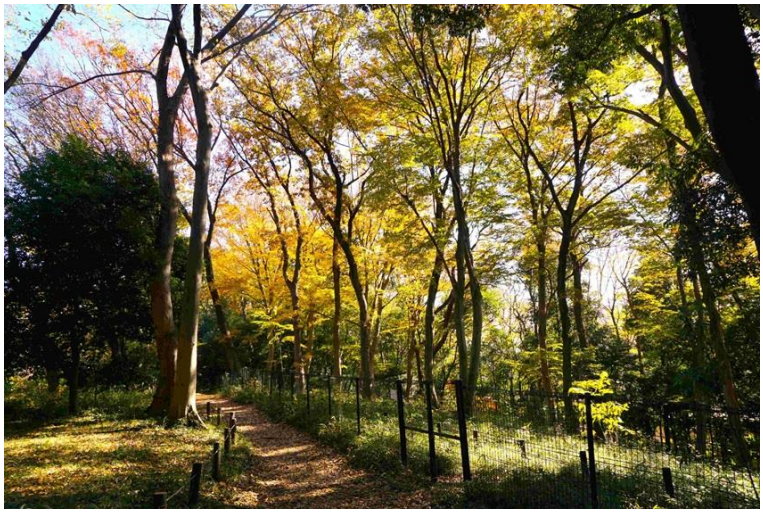
面積は両地区合わせて約 11ha に及び、泉地区には円形広場（1 周 500m）、西元地区にはこもれび広場があり､緑に囲まれ広々とした開放的な空間がこの公園の大きな特長です。園内には 70 種を超える樹種があり、ボランティアによる花壇など季節に応じた花々が楽しめ、なかでも泉地区のノウゼンカズラの棚と藤棚は人気スポットです。泉地区と西元地区はふれあい橋によって結ばれており、天気のよい日にはここからスカイツリーが望めま

す。泉地区は毎年 11 月「国分寺まつり」の会場となり大変な賑わいを見せます。

この公園には、私達の目にふれない機能もあります。西元地区の南側には野鳥の森と閉鎖管理地の国分寺崖線の樹林が広がり、そのすぐ下には「お鷹の道・真姿の池湧水群」があり、この「公園＋林地」は湧水の涵養地として重要な役割をはたしています。

❻ 国分寺崖線（野鳥の森・閉鎖管理地）

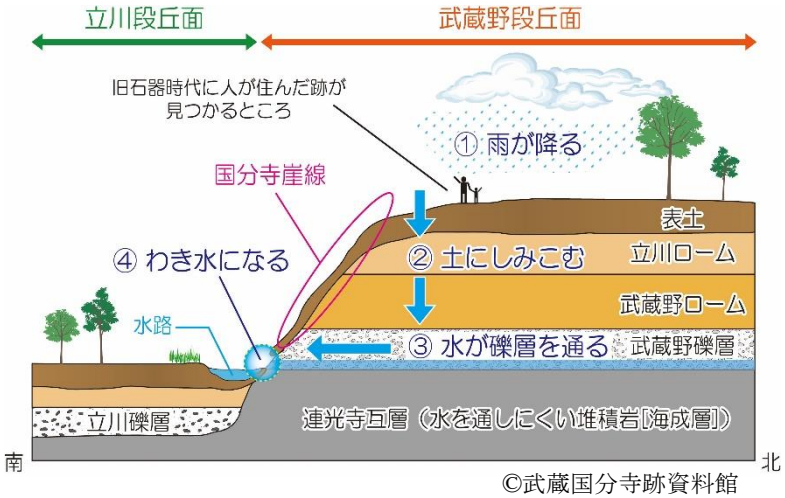
■国分寺崖線



武蔵国分寺公園の野鳥の森の南側は閉鎖管理地として、斜面一帯に国分寺崖線の自然が保護されています。国分寺崖線は、古多摩川が 約 3 万年から 1 万年前頃、地球の寒冷化で海面が低下し、流れが急になって武蔵野段丘面を削り取り、現在の武蔵野段丘と多摩丘陵の間に河原を広げて立川段丘面を造りあげた時に形成されたものです。国分寺崖線は、立川市の砂川九番（若葉町 4 丁目地内）付近から始まり、 国分寺・小金井・三鷹・調布・世田谷・大田へと続き、 総延長 30km に及んでいます。この始まりがよくわかるのが国分寺市の西の端、 立川市の若葉台小学校の西側で、崖線の高低差を見てとることができます。

国分寺崖線の裾からはあちらこちらにわき水が湧き、この湧水を求めて先土器時代の昔から人々が集まり住みついたものと考えられています。崖線の周辺には、多くの先土器時代の遺跡や縄文時代の集落遺跡が点々と発見されています。

■わき水のしくみ



©武蔵国分寺跡資料館

①武蔵野台地の表土は透水性の黒土。(動植物の遺骸が腐敗分解して生じた「腐植」により黒くなっている)

②表土の下のローム層は透水性と保水性がある。(ロームと言う言葉は土壌区分の一つであり、砂・シルト・粘土の割合がほぼ同じである)

③ローム層の下は礫層（粒径 2 ㎜以上の砂、小石）で水をよく通すが、礫層の下は連光寺互層と言われる水を通しにくい堆積岩なので、上の層からしみ込んだ水は地下水として礫層にとどまる。

④国分寺崖線の下には礫層が地表に出ているところがあり、ここから水が湧き出す。お鷹の道・真姿の池辺りでは「水口八十八カ所」という言葉があり、多くの湧水源があった。

■保存樹林地

国分寺崖線には保存樹林地もあります。市では、貴重な樹木を次世代に残し、緑豊かな潤いのあるまちづくりを推進するために、一定の基準を満たす樹木・樹林の保存樹木・保存樹林地として指定して奨励金を交付し、所有者の方々のご協力により自己管理していただくことで、緑の保全に努めています。

保存樹林の指定要件は、樹林地の土地面積が 300 ㎡以上のものです。市と所有者の間で、樹林指定に関する協定書を締結します。指定期間は 5 年間で、延長することができます。

武蔵国分寺公園の閉鎖管理地と真姿の池の間の保存樹林地は、昭和 54 年の指定です。面積 912 ㎡、主要樹種はコナラとクヌギです。

❼ お鷹の道・真姿の池湧水群　❽元町用水

真姿の池と階段脇の湧水、さらに真姿の池の西側にある「おたかの道湧水園」および国分寺境内の湧水は、「お鷹の道・真姿の池湧水群」として 1985（昭和 60）年に「全国名水百選」に、また 2003（平成 15）年に「東京の名湧水 57 選」に選ばれています。そして、これらの水を合わせた流れが「元町用水」となり、不動橋・一里塚橋で野川に合流し、野川は世田谷区の二子玉川で多摩川に合流しています。

「真姿の池」には、平安時代、重い病に苦しむ絶世の美女、玉造小町がこの池で身を清めたところ病が癒え、元の姿に戻ったという伝説があります。また、「お鷹の道」は元町用水沿いに整備された小径をいい、国分寺周辺が江戸時代に尾張徳川家の鷹場となっていたことに由来します。

❾ 小林理学研究所の湧水

今回は小林理学研究所のご厚意により、普段は立ち入れない構内の湧水を特別に見学させていただくことができました。

小林理学研究所は、国分寺崖線の森に囲まれた東元町の地に、1940（昭和 15）年に設立されました。当初は物理学の基礎及び応用研究を指向する研究所として発足しましたが、戦後は研究の中心を音響学におくようになり、現在は騒音や振

動、低周波音等に関わる基礎研究を行うとともに、様々な機関等からの受託調査研究を行っています。また、音響材料試験や圧電材料の開発や応用の研究も行っています。1944（昭和 19）年、小林理研製作所（現在のリオン株式会社）を設立し、当研究所の研究成果を製品化することから発展して今日に至っています。

構内の湧水は、設立当初、潜水艦ソナー（音波・超音波を使って水中の物体の探知や水深測定を行う）の実験に利用できるほど水量が多かったそうです。

⑩ 真福寺児童遊園地

途中、真福寺児童遊園地で休憩を取りました。公園の名前は明治初頭までこの地にあった寺に由来するのだそうです。

⑪ 不動橋・一里塚橋

■不動橋

日立中央研究所と東恋ヶ窪付近を水源とする野川が元町用水（お鷹の道沿いに流れる湧水）と合流する東元町三丁目にかかる橋で、江戸時代、石でできていたので「石橋」と呼ばれていたようです。橋の北側には、1832（天保 3）年造立銘の「石橋供養塔」があります。石橋供養塔は、水の霊を和ませ、橋を末永く安泰なものにしたいとの願いから、各地に建てられる風習があります。その隣には「庚申塔」と「不動明王」の石碑が建立されています。不動明王は村内に疫病や災いを入れない厄除けの仏様として信仰されていました。その後、橋が架け替えられ，不動明王の石稗にちなみ不動橋と改名されました。

橋の近くには「大正 12 年 3 月　田用水堰記念」の碑が建立されています。野川沿いの水田に水を引くための堰が設けられ、軍馬や農耕馬の体を洗ったり、神輿を担いだり、地元の生活の場として使われていました。

■一里塚橋

「一里塚」の名称について、1869（明治 2）年ごろの国分寺村絵図によると、元町通りと国分寺街道の交差する十字路付近は、一里塚と呼ばれていましたが、現在では、この十字路より北側の不動橋付近に一里塚というバス停があり、この地名のしめす場所が揺らいでいます。

国分寺街道に架かる一里塚橋の下には 2 連のトンネル水路があり、煉瓦で作られた丸形アーチの隧道（ずいどう）は明治時代に造られたものです。その後、度々起こる水害のため、水の流れを緩和する目的で、昭和時代に川底を掘り下げ、コンクリート造りの四角いトンネルを造りました。

⑫ 竹尾別荘跡

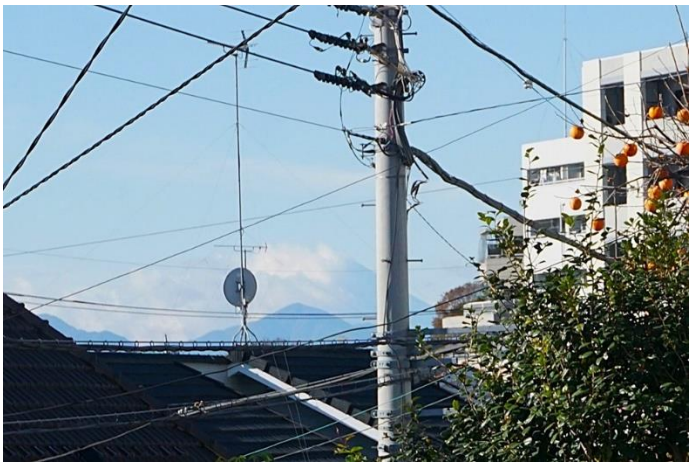
明治末から昭和初期にかけて、国分寺崖線をはじめ郊外には多くの別荘が建てられました。それは石炭燃料による空気汚染と衛生思想の普及、鉄道の整備と自動車交通のはじまり、さらに第一次世界大戦（1914～18・大正 3～7）による経済成長が相まって、富裕層が自然環境や眺望に恵まれた郊外に別荘を求めたことによります。

国分寺には江口別荘（大正 4、現殿ヶ谷戸庭園）、今村別荘（大正 7、現日立中央研究所）、豊原別荘（大正 1、戸倉 2）、天野別荘（大正 3、東元町）、渡辺別荘（大正 3、東恋ヶ窪 5）

などが建てられました。

竹尾別荘もその一つで 1919（大正 8）年に竹尾藤之介が建てたものです。竹尾家は 1899（明治 32）年創業の大手洋紙問屋で、現在も神田錦町にて日本有数の紙専門商社として営業しています。別荘跡は現在マンションになっており、屋敷内門だけが残っています。

⓭ 丸山



殿が谷戸（国分寺街道）と本多谷（丸山通り）に浸食されて崖線に残る三角形の丘。標高約 73m で、全体が南町 2 丁目に属します。戦前までは雑木林などに覆われた人の住まない場所で、頂上付近に丸山神社が祀られていました。1755（宝暦 5）年の創建と伝わり、江戸時代には山神社と呼ばれ、明治時代になって丸山神社と改称されました。丸山は戦後すぐから宅地化が進み、その中で神社は丸山の中で 2～3 回移され、現在は南町 2 丁目交差点からの上り口近くに祀られています。

丘全体に住宅が立て込み、標高のわりに眺望は家と家のすき間から覗ける程度ですが、1 ヵ所わずかに富士山が見える場所があります。この日は富士山の東側に雲がかかっていましたが、かろうじて見ることができました。

⓮ 鞍尾根橋

鞍尾根橋につながる登り坂の名所がくらぼね坂といい、馬が転ぶくらいの急な坂からついているようです。それにつながる鞍尾根橋ですが、馬の鞍のような形の尾根道とも連続したことからの由来があり、鞍尾根とつけられたようです。（くらぼね、鞍尾根も語源がおなじと市の学芸員から聞いています）

東京経済大学新次郎池から流れる湧水が、この橋のたもとで合流しています。この地点は国分寺市内では最も標高が低い場所で海抜 55m、ちなみに、一番高いところは国分寺崖線の始まり付近の西町五丁目けやき台で海抜 92m です。鞍尾根橋から下流は小金井市となり、桜並木の堤防の中の広い川原を野川が流れ、緑豊かな川として多くの人々に親しまれています。

⓯ 東経の森・新次郎池

東京経済大学国分寺キャンパスは国分寺崖線に位置し、崖線に沿って広がる緑の回廊の一部をなしています。「東経の森」にはかつての武蔵野の自然が色濃く残され、多種多様な動植物が生息する環境が維持されています。東経の森は 5 つのエリア（さえずりの森、緑のトンネル、新次郎池のほとり、日だまりひろば、どんぐりの森）に分かれています。

東経の森の主役ともいうべき「新次郎池」は、2003（平成 15）年に「東京の名湧水 57 選」に選ばれています。この池は北澤新次郎学長（1957～1967 年在任）の時代に湧水をせき止めて造成され、「新次郎池」と呼ばれるようになりました。

新次郎池の周辺は、2020（令和 2）年に創立 120 周年記念事業の一環として、環境に配慮して水と緑の空間へと整備されました。その新次郎池を囲むウッドデッキは、東経大のシンボル「葵」の葉型を意識したもので、周りにはフタバアオイが移植されています。池の水は、お鷹の道・真姿の池湧水群の湧水と同じように野川に流れ込んでいます。

なお、東京経済大学の前身の大倉商業学校の創立は 1900（明治 33）年。以来キャンパスは赤坂葵町にありましたが、空襲で校舎が焼失し 1946（昭和 21）年に国分寺市へ移転。シンボルの「葵」は大学発祥の地にちなみます。

この新次郎池の見学のあと崖線の斜面をあがり、開放的なキャンパスにて参加者の皆さんにアンケートをお願いし、付近に在住の方とは正門で一次解散。残りの方々は国分寺駅へ向かい、駅手前の殿ヶ谷戸庭園前で解散し、第 14 回エコミュージアムを終えました。

【参考資料】
『旧下河原線沿線探訪』東京都立多摩図書館 2018 年／『国分寺市史 中巻』国分寺市史編さん委員会 1990 年／『ふるさと国分寺のあゆみ』国分寺市教育委員会 2007 年／「東山道武蔵路の説明」国分寺市教育委員会等／都立武蔵国分寺公園 HP／『武蔵国分寺跡資料館 見学のしおり』2016 年／東京都公文書館 HP／『みにこみ国分寺 52 号』国分寺市商店会連合会 2020 年／『国分市の民俗二（国分寺村の民俗）』国分寺市教育委員会 1992 年／「東経の森・新次郎池の説明」東京経済大学